

貞享式海印録  
 月 又 秋  
 日 正 冬  
 星 正 冬  
 植物 生 類  
 四

5  
 4676  
 4





4675  
4

昭和十六年一月十一日  
尼野貴英氏贈

貞享式海印録四

曲齋剛述

二月廿五日

雲月花の風雅の的之月日月とあり花の  
厄季はあてに世は月と空とあり中略は方ノ又  
先へ出入  
初心の人いづく月七の月花の十三の月あり  
もひきと他人、懐の時宜しりるありても  
子細ありき初月を風雅の及吳あり  
あてに竹もぬる程をさるる月むの白牙  
お寄を束むへるに居る尾の宜し居て毎  
仿のある白ぬも其時の程よき指し付ておくし  
お校月むの社といふる初心梅古のおよある  
おの月花の社といふる初心梅古のおよある  
あてに梅もあつても又いづく方三日月のあり  
むすし五の月ありと月花といづく杖の白の  
附五のよりお寄するなく他きの白あり

カイ印記

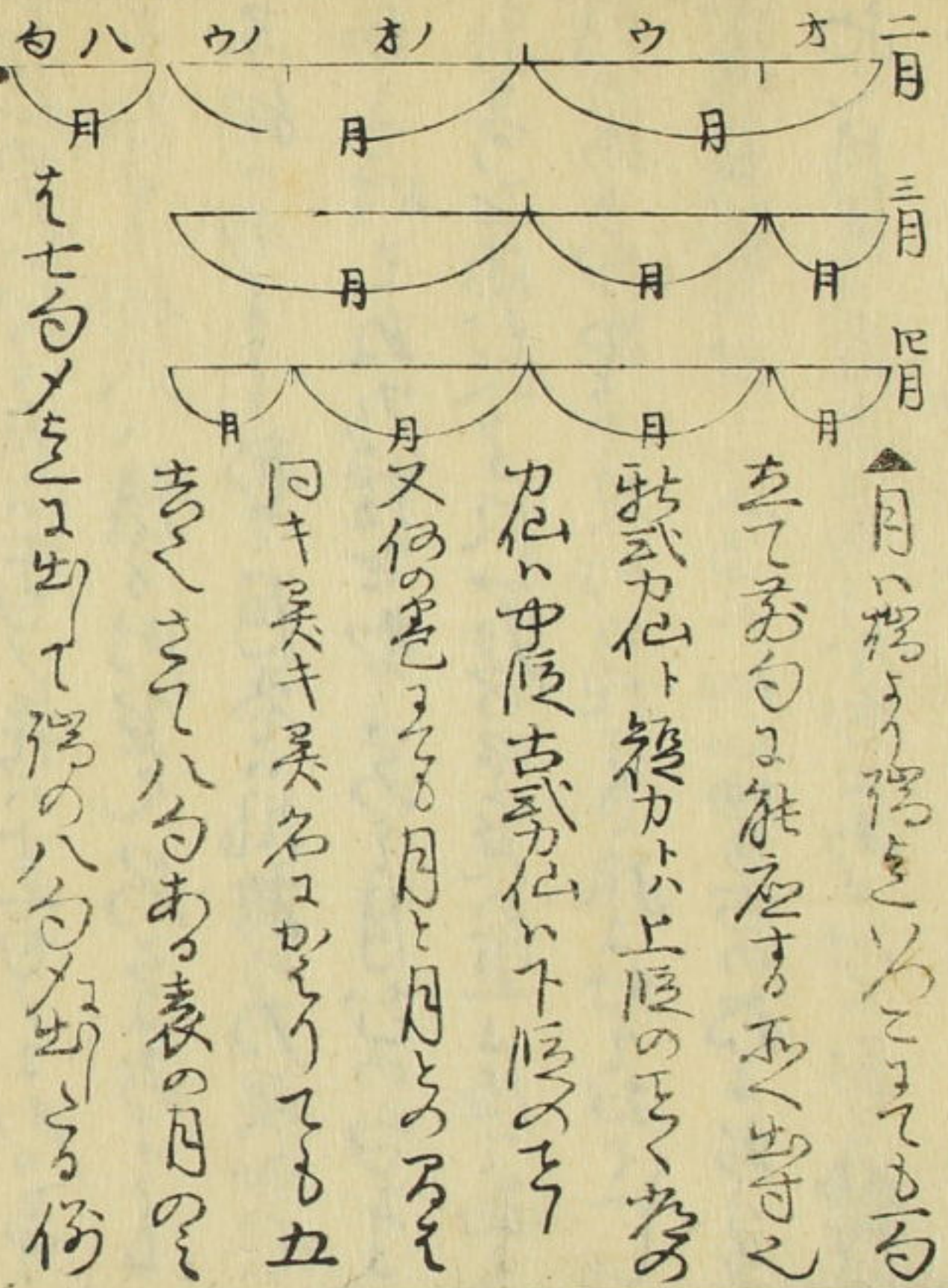
一



おのれ月ありても苦く凡只表の月一ツ

初め月花あるべき又引上て出す月む正花

正月ある一まを助字の月むまきいふ用之始



あきい表きくして月の傍に際あきかえ初て  
表他キの月イ名の月出或い月むの在入代  
ら月あるもの中皆あ白より能する中て  
きと控指を分むとてかまてする中あ凡

△ 助字の月

休字はし

休 伏又あくりの古手屋の月 為

去 糸久をもちのえと鳴る月 カラ

展 襷持をくりたる月 ヤハ

助字ハ傍ある處にむあて作るを月字に  
移るをよけ白皆空にありと助字を用る  
を表張の意と矢さるるに似令りよては不  
も社を助す付の表するふあてはけし

△ 秋布白を二五並ぶる月 多依者

三無去秋の季続四白ノを花月の白とする  
事必ある事との所後く

△ 只所後くす連て花の表の内は白ノ下  
決して寺月の白ノの得とする事ハ毎  
まおるおとあし一おるおとの連あるに凡  
ノ月月の正る白獨は日字の傍あるさる  
へとあ白をさるるに六ノは出いえりあり  
例に凡る替りゆく月の 際 為

秋 月あき池を曲る山石 一井  
 小文 秋市人のとく夕月 史邦  
 義孝 ちよくの火を暮る夕月 正秀  
 花也 さうし月を燈るあのみさ まさ  
 白 杖もやうく向る月の 許玄  
 东山 灯いと不さても先月秋之 一盞  
 其帯 五つ月を化移る武老一人 翁  
 休 古我坊月も移る上院の 嵐三  
 一と 又起ておの細き糸のちね 権権  
 △お標を正す月 寺及多者

標の月いる白も一盞の定座とあすいか仙二  
 不いし 何れ白の中傍にヌウ何と一  
 僧 八景をかくす新秋の月 城人  
 哲 月も三三三の名ユウれつ 多天  
 翁 山のもう月の一ひら 種不  
 翁 月のあると何とぬ月 小角  
 雅 翁のおもく月のかうと 彫業

夕 早の備を名すありあけ 白松  
 キツ 月もや今も月もまの 杉風  
 化 月をともる月月の 徳代  
 白 夜をおりる月月の 徳子  
 乃 樹の影の 藤原の月 ソラ  
 翁 光る月ぬり月の 口カ  
 幕 月もばやの 水戸の下町 虎考  
 屋 一と月の おある 素氏  
 署 翁くちねの 月 邦  
 佐 月をともる月月の 翁  
 梅 月をともる月月の 天垂  
 白 翁くちねの 月 栄平  
 名 翁のセネー 月 月 月  
 其帯 ナ又ひらけり月月の 月 月  
 以二例に月カ仙の舉ぐ

三冊 月の定座とあすいさ白也白より  
 内にあるへうすも月月の無もある

おしカ仙の苦うるま 思ふおぢ

▲おの志うやふなあきり 次の例も又よ

炭 月あしむき上階の泣きうり り年

△お口(引上る)月

七き づんくるとろこせまの月 涼ト

笠 月をわをわを清る日用も 箕角

其帯 傾博の又すうする 秋月 清風

化後 去る程の月の成るの月らし 陵き

△吳名月

世あよ月をの睡あき付るイ名に用ぬおと免

人もあり梅子イ名を用るあうに用あるあ

去 乳をこし皮の骨をちく世よ カ号

傾博乳をくく寸お 明 昌圭

只抱女の素乳を研る海奴の心付くされ下尺云

難あふん東雲よ曉トカすきと杖されお月

尺せむよさるの国の海あしと必帳でおのトハ

字さうイ名の入用はくわくのま

萩春十曉の新とのせくる 白牡丹 女我

みの 彩あつ 一き極陽のそお 風之

西橋 桂うけらる 方のよりそお 花黄

冬 西南に桂のむの蒼むむ 時 抱笠

難 久々の急も是る毎きう子 習友

夕良 青の影のすの約き彩りぬ 我吳

百広 てるおの知あの方乃らさよ 江柳

十七 さうえ男 傍山 訪りく 碧之

中 彩さう桂男の 取て 小枝

フリ 乃よまきれぬ十三取く 堯丸

春云 明のおの草とそれも八幡傘 ト

天有 立竹の中きい法でおさまん 乙由

三、 九三秋も 杉の 曉 山リ

お ふうくとるぬ 字きおね 八葉

金鈴 已法をまう川嵐や 風や 吹衣

他吳あるとりあく 因云 蕉門の 姫嫁 金到

登の彩あ古武に用味さおを 用さるおあ

その姿のむききりて自らせし桂子ひまの乳  
もかゝる依きりて用をたまも掃く

△ 一名カ仙ユニ

多例者

句 神 言を言あくる神の宮に 月  
おのの田は少つきの小方丈 洋云

女帝 さくらえ男 取乃まゝ 嵐書  
殿中を走らちの糸をきり

歌 おのの舟をなをかきのせて 牛角  
ちるとりの傍の咲白りり

又標 秋衣殿令の園を竹をて 甚二  
おのの花も人のまゝのう

おのの必 源治の歌あれや 咫尺  
桂田の登一をあるを 靴 長水

△ 同他キの月カ仙ユニ 異他キ例畧

古今通式の句も同他キの月記をい

上 門書の採白ユ子む月をて 月  
おののむの葉おちりきち 千川

り おの山乃 嶽をえと月出て 村女  
時めきて 子のあふり月とむ

孫名 山をやくおの空く 手捲て 角  
月おの結のあろくとあく

三日 推 やれおまゝんと冬の日 支志  
枯果て 樹のす人と月のを ソセシ

誰 ねとるあとの月 汚れ ぞ  
ハ ちきつて 月よの女舟 水花

月のおもあすうら 玉懸も 方丸

△ カ仙三月短句の妻格

月短句もよと括へすぞのさうも若う守

カ仙は短月二の三の御守れ 中曲言は  
片方の曲言の妻格 かりせぬはあれあより  
怪されて出来 何又この妻の妻格 子き傷之

名 七時山を 出うら 月 月  
いさし 三便や 娘持の月

髪まきる 月の月をひきあぐ 雪

拾

石踏く一寸花城の月 ソラ

碑にねて象々の月 信風

香おやの 月の十五夜 素英

まよやくこの口とむ月 重辰

栞きりあきき月も及び 安住

真つむ舟の窓より月 辰

月の隈く尺麻の 門 キ角

身におもてうねの月

あまうたの 月のせりり 口屋

折しし翁を月よ翁を 仙化

残雪 月も花むを雪の新人 文り

あられの雪を教む 飲水

△お後同旅向の月 多倍者

同旅向の 苦うねも同体い 宣うた

残雪 ちのちをす 丁月行 翁

残雪 月うけよ小窓子 仲るの 誘つる 中八

残雪 月うけの雪もさる 雪のま 支考

拾

弓引て旅初の月のうけ 外考

夕月凡一 二の丸の初 英

候の時うら 夕ぐれの月 考

夕月をとて 雪おふ 雪をよ 去来

雪の月干たの 茶け 雪を 日午

撲し 夜来る 古 拒 八

そまうと 板屋は 嵐の 舟 舟

月おき 雪を 雪を 長 堤 正角

月おし 雪の 雪の 中 反村

そまうと 麻の 風を 舟よ り由

雪を 付て 又の 小の 十五 夜 許六

あまの 中より 又の 雪の 月 翁

救免 月も 月 翁

明も 月を 月 翁

初 月 翁

初 月 翁

初 月 翁

初 月 翁

|    |             |      |          |
|----|-------------|------|----------|
| 北邊 | 東邊より        | 西邊の月 | 松緑       |
| 南  | 南           | 東の月  |          |
| 去  | おの月         | 候    | 辰セカ号     |
| 名  | 其名打を返るきぬくの月 | ヤ水   |          |
| 名  | 月又歩は        | 夕の露未 | 白之       |
| 名  | 夕月おだて       | 後    | 実法てソラ    |
| ヤハ | あまきま        | おひ   | 月の初人     |
| 印  | 言           | 番人   | よ名を返る月とむ |
| 舟人 | 辰           | 辰    | 辰        |
| 格  | 竹           | 竹    | 竹        |
| 生  | 生           | 生    | 生        |
| 兼  | 兼           | 兼    | 兼        |
| 種  | 種           | 種    | 種        |
| 仙  | 仙           | 仙    | 仙        |
| 一  | 一           | 一    | 一        |

良を湯やうく胸集す月 為  
 度衣候洗し袖の月 杉風  
 揚屋より月、雲井上ゆき 為  
 比之候、白句之カ仙、喜月二、是南、辰  
 次句、言、祥、お傍、五、月、の、法、を、刻、む、  
 傍、月、は、秋、と、し、東、合、の、傍、  
 名、文、川、は、す、る、や、あ、る、月、の、月、キ、角、  
 名、う、し、志、あ、の、さ、や、し、瀬、ま、の、月、  
 神、尺、名、の、傍、の、不、名、短、月、の、あ、ア、も、あ、り、  
 △古式に月カ仙  
 其、さ、げ、は、や、三、井、の、事、お、は、た、た、し、旦、弓、  
 言、低、の、く、そ、あ、た、り、山、し、故、人、  
 本、著、は、不、ま、お、の、龍、向、お、打、候、より、守、向、あ、ら、お、お、  
 松、竹、天、家、あ、る、へ、く、又、中、そ、月、て、お、打、候、の、傍、  
 宜、れ、れ、と、て、夕、き、あ、ら、と、る、出、守、し、候、月、の、  
 御、り、る、く、そ、入、あ、ら、ひ、  
 又、お、り、り、九、九、の、月、さ、き、カ、号、



とせり今も風情よまるあるへり守けり  
むい引上月あふ三出されいをを流るる雑り  
挙てよきあふさるを定い月あふりけさる  
二月を出りて定り定り月出ても風雲有力  
といつて故は其奥を勝て舉白と冬を流るる  
▲月におくよおるえカ仙に定るる句後祀の月の  
者候と定りさるる月の月い定候あり  
あはれとく月花あふりて後祀無及具の時  
あふりてすさるる候い其候中候事「橋外食  
白多む橋外候小弓ホは種拾さるる」と

月の子石の柏子葉て来る 土新  
八月むを紅の宮よ 田原り 支原  
名月の候は南なる冥赤也 素文  
+ 坂の居すらあるおてあふ月の 月  
暫よの候はあふ月の 林 秀川  
おふの宮乃けきさる月

後

秋あり 月おくしお毎仕よき多際 巴丈  
あはれりる度もさる 林の志 九次  
百句八月の候い「紫ハタ多 桐山伏 东山墨也  
ホはあり 笠松七土假二月の候もあり

△新式二月カ仙

本カ仙の候い二花二月もあふさるる表の五  
句メ二月おて祀る七句メ二月秋さする中を定り  
秋キもあふりく秋キの極おも仕るく 秋キのあふり  
ぬ時表る程二月一ツあふり苦るまきさるるや  
は後定るる人もあふりまも亦二度の会釈あり  
▲新式お侍半角序六去来しされい三子の中  
は後定るる人は遺ををりては式を立へき  
を定りよくあるの候い一是も其の候を定り  
世を定りて各園々む支考りえ祿八は去来も傳  
後再撰新式の志あふりれい定を定りくやど  
享保比よりは式を立り 秋キのあふりあふり

秋不白の付ら大方方之と上月出て花をある  
 長りぬる三月カ仙にせよとて表を程よ下  
 定むるまききとて才とて花をある時只一月を  
 表に出して程の飾あきた一月の程を延く出  
 又及まの不白も季も極限ある時月を  
 表りも物一陳穢を愛せよとて更も亦た  
 舎秋あてしとて武不母のほそらに  
 けたし物あ人の集もたのカ仙と武交を  
 熟惟よとて相仍初よとてとてとて  
 のとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
 季三ツへまの信をある程言を  
 先の資格のささささささささささ  
 子自互の人と武武の用るたとてとて  
 カ仙と月三にあるをある人も柿よとて  
 移り程移を定たとするも被く

△物武カ仙表よせる月

シ、 五月の横ユキトむ鳩 向 柳風  
 葉、 月又又は一申の戸も  
 △原氏四月の位

有そ途原氏行し學に月のある者法よりカ仙にえ  
 原氏の中二面を除く相あれはカ仙の傷をおし  
 いきもあつたカ仙もたは月あるは原氏に  
 とくせよとては原氏の時待も付の表松あり  
 やとてとてとてとてとてとてとてとてとて

△経考まあり月

イセ <sup>ウチ</sup> 感おとあまあ十おの夕月取 柳如  
 月をあるとてとてとてとてとて

△月面を痛て去 古今同

印 昔をある 月の 度 小枝  
 月をあるとてとてとてとてとて

三正 一おの山入りのおの形 支考  
 うりすとあるとてとてとてとてとて



△カウとガツニ去

名目一尺八寸七人向む 夏を  
うき恋せしひと正月 加鹿

△洲の月並ユノ名然不燿

和月まろ字ユノ名初て 夏州  
月の多きは良もはまぬ 涼水

弓矢の只うまくと望るれ 如柳

お局の及ぬ恋イを 孫 一函

さうくくと栗の秋風 杜良

七月何うきくてもあむ心 天葉

△青の月並ユイ名正月裁不燿

一川一ツはてききおんり 月

宗上のせくる田上の虎 文州

平月も佳ぬは淋しき 西き

三月も佳ぬは淋しき 涼

美の上土名あま林の風 夏舟

一庭根のりくふるおん 杉風

ヨハ

夏

冬

冬

夏

冬

夏

梅月の梅むいさ守中より 嵐者

お局の竹の扇いそぎし 秀和

一考くくと娘家や妹と逢む 舟竹

云沢も二月もさうさぬ心 新水

知契のこゆるらあへき 新水

神の月舟拾まうれらぬ 新水

去月や早うきおく嵐山

夏 是は後橋舎と名示方仙のたむけしきつねのむろ

冬 きてイ名の月の浮はあり許さるれは仮名よかく

夏 加玉抄の御あはれ二月八月と仮名よかく

冬 月とく一字の字とあしとて始

夏 此とあし仮名よかれぬかきまも字形とあし

冬 イ名と用しは浮はあしはあしとあしと正月

夏 さけもよきはくあし丁の狭き御あはれ後橋舎の

冬 七かま支考もあしとあしと月並と月と二月

夏 の許あはれは後の会こくはあしとあしとあしと



春香

由松のうけやちりそ夜の月 香水  
地蔵の秋もなき赤糸 考

日用

日用や何や志れぬ大工て 佐波

日記

新改やるの日記の付居し 可也

世のそそく信人の家 考

川水よそよひの園のあはれし 梅算

自注日記の表紙よりこれ月之風をいふ

▲日記一月之種をいふ支考版のあはれをいふ

コハハオコをいふ支考版のあはれをいふ

△月よ降律風照新天未成不煙

▲五月の月よ月之種をいふ支考版のあはれをいふ

つる月目の妻と志るへきく神

▲正月の松水清く五月の月よ月之種をいふ支考版のあはれをいふ

五月の月よ月之種をいふ支考版のあはれをいふ

五月の月よ月之種をいふ支考版のあはれをいふ

五月の月よ月之種をいふ支考版のあはれをいふ

五月の月よ月之種をいふ支考版のあはれをいふ

一橋

如乃始を日も白あき 牛角

依ての松水清く五月の月よ月之種をいふ支考版のあはれをいふ

注初の松そ十松の坊の月 杉風

深

思ひて 袴の松 西考

一橋の松そ十松の坊の月 杉風

中

まろく向るもり林の山 貝葉

キリ

為さるの中よ一むれ丁の声 花白

三平

一橋の白や月の影し 千山

三

風冷しとワセの松橋 冬月

ニ

とふ丁は物の傳ちあはれ 熊籠

枯

合相あき言ふ歌くも 神夜

ク

小僧よ集て勇つく歌 梅水

毛

扇うら風沙きし守月の香 栄幸

梅

花うつる中を流の吹やうて 考

松

松のあはれと通る公家流 卯七

月

月々月もあはれさう下巻 去来

凡

あれくさまいほやくゆふふ 穂穂

夕

おののぼとある粟の穂 穂

了

お月お望みへ衝道付て 刃

了

本妻の毒を毒す月の色 光

了

悪くとりきい角力丸く 之

了

てる事も月守は悪る肥お置 之

了

先より使の老てくれあて 涼

了

あもよめぬ人さえん 林

了

おのむよあとの月の色や 栄

了

版志ひは内衣のあつきの月 尚

了

印志す機をこそ書く秋 回

了

鳴きなき懐格子の哀 芭

了

久しうのあつきの月乃月 教

了

恨ま件は一扱きく秋 甘

了

初する二人の秋のやそく 甘

了

新舟は乃男あめあめ 甘

了

やあおほき 穂の夕くれ 甘

了

お初め良あつく月よき 葉

了

久きのせき 鈴は月きんて 一

了

懐あつく 神も 葉 葉

了

松竹の白よきの秋とより 葉

了

まきねの秋あつての月を 林

了

角力自惚は角力とより 竹

了

肥あつ病もよそてむの 如

了

茨房守若の白よ天気合 昌

了

春の懐はつてくしり 柳

了

すむ月の懐は懐れぬ横田川 胡

了

あつつり言をよそてよ天を 屋

了

そそも大方むのちくく 水

了

月おつり言も言もあく 支

了

いさま 宿りもあつて 冬 柳 葉

了

能くわくく 後の粘き 粘

了

秋の心と秋懐す月 秋

了

嵐くつるを今も月二つ 松

カイ印

三





夕

夕日ニ接ふ處の陰於 昌柳  
山より月と車引接て 未竹

車

棚や栲日のも 陰上 玉入  
空よりつづく 弓矢の志 玉吹

は行方いあふ天をれす朝風葉あぬ接する

△月次九月を未十月之村を懸言

秋

惟子もひひあふる八九月 支彦  
月十五夜十之夜 月 仄止

又棟

国。三月も四月と名せれ 乙由  
あゆもむもんのこころの 栲如

是身

芋栗と接ひきて八九月 何声  
たよりあきも今も一腔 雁く

名置

兼の子代もまて早九月を 菴飛  
うきよおぼろささきくあゆ 宇栲

白鳥

あゆも花布柳工透通う 菴睡  
亦月乃くまらねんそ 天書

之

十三夜い志と兼も文名栲 菴二

木のこころまおのえの七月 山り

△月二お葉の村

お葉お葉お葉を對する竹のまをさくぬる  
ま減とれと心もて村の時より 之より夕  
月おの月と村よりあゆみれと接する  
竹心も拙くむ只法接せれぬ接する

一橋

接お葉を身接く旅接して 可歌  
兼乃月おの接するむ 菴

山琴

村さよと音の月を拾お 音小  
まきこまりよむちおし 秋房

虫巻

音接る西の法接さかの 月日 菴不  
まきこまりよむちおし 柴友

四幅

字交り眼をさく月の下 凉ト  
お葉の上をけりる 通天 小

翁

秋のあつるまはとぬ月 木角  
きり接く音をさくまきこ 栲二

コハ初て法接の扱

△月二葉箱裏花火の村

月二葉を結又星を付くも箱裏より火を林  
裏のおもひたす星を背て月を押しぬるなり

思慮を月二葉のまゝとす  
孫のまゝのまゝとす

お花 川舟の橋を引よて ソラ

移のともあつて又月 舟

土 月二葉の陸路の月を照らす 式

移まよ舟を引よて 村

花 花火の像をおする備の月 宗

西行の像をおする備の月 宗

さ良 花火の灯してとるなり 翁

花火の灯してとるなり 翁

三平 花火の影の中より袖の月 立

花火の影の中より袖の月 立

△月二葉箱裏花火の村

月二葉を結又星を付くも箱裏より火を林

分むと種々の法あり 月二葉は只月字を合

のこあれは月二葉を合す 月二葉の形あり

毎三葉を合す 月二葉を合す 月二葉の形あり

二葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

三葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

四葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

五葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

六葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

七葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

八葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

九葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

十葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

十一葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

十二葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

十三葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

十四葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

十五葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

十六葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり

十七葉あり 月二葉を合す 月二葉の形あり







とは又星の格合は向うお方を垂ると白作  
南用と相ふり二つの号はあつて何れを  
もそらるるも是れもつりきり合ふ

氏文も月次を正す月も乃なる子柄を合じと云  
の秋分をまきりて出たれと甚々の秋分を去り  
しるは六の星は夜分秋の資格ある自體を以て  
凡て支考の文いやはあやうし多し信は正案の  
月自體を奉るるに相もあき何れあれ  
古月の名は使て月の自體を知りぬお  
されは正案あり月の法と云ふ事あつれ又  
おのりあつて月ト数するはあの子を月ト  
こそ是れ也一推集の推指く但は仍るは  
文月の二資格あれは本文を分けてこそ再考  
スレ 干おをききて考ふぬじり  
月へまきりて月月の扱  
はけりあつて用として干おとまきりて

るる一扱て新月のけりいさきりもそらるるも  
二の月のけりいさきり多し情の意あつては  
深の種といふ一扱今に正案をてお后二  
凡例と云ふは正案の何の子を正化せし  
△は結文と云ふは正案をてあま正化せし  
こそ是れ必は正とては正とては正とては

△陽月の資格

お正月のあつて神の宮に 三  
句 かつり秋の風そよそよ 許さ  
八月は格面白き小振 函  
本正案の月いけり一扱は正とては正とては  
おあつて正案をては正のん月とては正  
八月の月字とては正の月字い合は正とては  
是れ正の扱といふ正案を月といふ正  
三の正合て月字の御と云ふ

龍野日正案といふ一月のあつては正とては

●三十一  
月より一と秋を討ち八月より月次を出  
せり今八月黄坂より尾の尾花の月秋の  
坊上信長よりおられいそおきの傳もおられ  
毎夜書寫院の月よりかきうくぬる  
[三十一] 書寫院の秋は只今の月の傍を合せて月と  
書し古法を携りきりか仙二花二月の先兆  
としきり南條の如用といふこと持ともは  
その傍に相おし候の妻連あむし京門の學  
者も一人二人いま未天岳 少後て書寫を以  
も月よりしり討たの長藤の只門人にお  
てる世の如くへきり天洲のさし

▲三十一日書寫院の月ありきり書寫院  
は取ありし月よりきりきり書寫院は仙二月  
の先兆は秋武をきりきり書寫院は曲り  
おききき二月の先兆といふくス杖をかむし  
[三十一] 風ふらふ書寫院の月より書寫院は

は武をきりきり上いた法いおむしきき月より用  
けりははははの之をスリ即時書寫院を月と  
表の之をみそのるく持りきり何の如くあり  
月より用いあきりきりきりきりきりきり  
ありし信守は六條川の合後といはれり御前  
▲書寫院は未末家を知らせし示てる世の如く  
おきりし或人向日今書寫院は書寫院より  
おきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
いそりおきり又書寫院の傍を写しきり書寫院より  
又おきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
懐いそり書寫院とありきりきりきりきり古法  
を携りきり大急をきり後附し書寫院よりきり  
因云書寫院の無様おぬり書寫院の只子と書寫院  
書寫院より書寫院より書寫院より書寫院より  
云を信守は六條の道より書寫院より書寫院

支考の所の合意といふも其意を合おせり  
て述す又其意を正しく自己の之を踏  
造すといふ也て其を省ぬ矢ありキ角に  
中にて兩の両矢あり又其格に自在あり不  
キ角支考涼表のに子に己下は人の教

秋ふらや朝けの星あき  
西巻 ちりりたる松の葉のま  
ま行

映探の奇み誰に袖ぬれ 支考

〔重〕相日の松に疎て月を望むく傍て方  
星白し傍あききして其表に月を  
射すもあききい夜は映探の名を假て月の傍  
を合ふるきりや其を花といひ史料を月とい  
むし誰か月むしあきといふ傍てあきを田  
毎とえあき山田の形容を移さくむやさ  
くくとも其のいひ史料を月を  
假すは是れとあきのうらむくめ

佐考の眼力があるべき

△コハ考考の語月を考く其格の扱は  
そ其の考格の扱を映え其あきを編め  
時の格のすあきむ映し又其表に月を  
あきすあき自ら其のまじりては  
あきす又其表のあきむくハ  
まじりてはあき其のまじりては  
まじりてはあき其のまじりては

十 鶴さりとそと口くさ月 角

鹿さるるもするそち 枝衣

其 鹿さるへてそまの山さよとつれ 桐子

ア 月影の門へつさせしむ 角

、 困栗と只るれよ老の母 子

西花集の元禄土倉屋築の同士の出板あれり  
はと編一に月つてそは戸を流と痛て同体あり  
毎キ格原月の扱ある考もコハ一子修花格の  
月山に月とちや一なり一考格あれり





句の秘する所行平業平の毛きくすあすま府  
と陸君の祿門はるの徳を加合する月の  
傳の文にて其名の冥合の神功をいふ

▲只文月の二変格うすや月の月と光と色と取  
その月とば条と三変格の事とくいはるの例なり  
今の字考より内をばうすのむはんこり

折月花の取とくさむ九条あり月と八条あり  
一字も自己の道理とあす其たは月と光と色と  
例の不可止とするを神の徳の表に取らるる母

るの人ありまを好むと求むとくはる月花と  
取とくす月むり神のれ用にて例なり  
和すく例の言すく例は太和の名にありとあはし

▲只月花の和語法之を廿古今の字考を考す  
して二巻の月むりも正月の恒れに例れい  
きて取きたるを考すはる月と光と色と

月と光と色ととて只世作の徳を正風作とす

或は月花の神の徳を毎く取らるる

月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

取らるる月花の神の徳を毎く取らるる

後 影多く思ふらんお月 先放  
芋久月もやふり燈 改

和自 竹葉の清きよきも思ふむ 如行  
竹葉の月のさし 久

休 ちりちりい降下の月 西を  
竹葉の牙を聞らばのうき

之の老老の部も何あり

赤尾 ちび引すうて 陽のきりきり 花葉  
三何多りれおたれん甲斐守

△月字おや非月お正月よま

月日 月の目早 早月お 非月お 月お 月お 月お 月お

月日 又月の枯せさる月日 占未  
檀子く 梅の陽のいお月 老春

又帝 老後の糸流連るまの月 百り  
去のく 曆月日ワリさき キ角

十七 ちくくきく 線乃月 口杖  
号 造 九月日早あれや 糸を

母上似上号の月日 甚二

甚二はか白の女の金博く其母の老きより 仏社  
のふよ去れて晩きよは子と老るよ花老の老  
たふ子男あれやく役りく依は老の浮行  
カ仙今月の二花二月あつはつ二月の早の老の  
又あれ打仔らん月用はは早月お月乃  
何は好ては程のおはイ名の月を月用はは  
其後いらの浮位を号よま古きより母の二  
裁入て声よ三老の文とつまのまきといむは  
おれを細くたせん女子のいけあくおれを  
其の陰れあれんその方おれむは月早の扱  
といきまの終とい程も二世の最後あつ  
上文のそくまも子細を強てはむし時い附子  
又て初女をむいばるるその母の月日おの声  
あ又月お月まあれおはと其もまてイ名  
とむい番番てイ名あれおれも又又



△オニエて角るス秋

多角者

菘の根をさそふむ秋

おろも掃む秋の草木

七夕のハハハおのまひりて

△又秋三お

△サハリノ下

白麻

キクキ

文一

引菜の海へ菜の白く分

ひよきのそく窓の杓材

自利する後へ秋を憐し

町並の奥や菜をのり

旗をよそへて

掃きまをり角力の関を

ほ吹といおれて

小袖を脱ぎ

丁の声おゝ夕日のみちり

竹ゆく小きあつく

奥のまきう

中へは伊母の聲を

及

浪化

林石

支考

呂風

萩人

風

後徒

化

風

石

人

其二

其三

其二

其二

秋

其二

其二

其二

其二

其二

雑

菜の目や三浦の秋又何

笠をい

控をい

乃く

△

おまの

△

草の

草の

く

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

秋

彦

石

車

山

且

木

高

綱

付

通

独

ト

孤

千

拾

石

嘯

風

干

鼻

細

石

キ

カイ脚

・六八



▲かくつらん初この月を皆杖とする竹のたて  
 考へ白揚他きの月出る付まよス杖とするも  
 ▲他きの月出てス杖あるも又前後あるも両何あり  
 木ス杖のち古末も終る高松のち月より互  
 二通ス杖は尺をけりて去杖のち終へ  
 三古云く蕉門は其さくあき中流るるを志す  
 其方の月く去杖を通し季を捨てス杖をつけ  
 あり杖引れを終るく却てス杖の捨てあり  
 又ス杖上他きの月、終るく終るもあり又他きの月  
 出てス杖あきいちのちあり

根本

〇 青の終るまをえあす朝月 月  
 〆 杉風の情多終る度くして 虎志  
 〆 竹店杖と藤子ゆりき 牛角  
 社日東くうくう終るの理さくも 丸  
 〇 門元の舞鳥よ子む月きんて 翁  
 〆 乃さむき初るあ裁の杖 家股

ヒト

杖風くささるく 裡庄者 以翁  
 ちりもるおの目さるる 陸子  
 ねさく痛の方を下さる 千川  
 〇 夕暮の月を今とて下るる 志守  
 〆 西風をつけてゆく 蒼森  
 杖さく末平よ居れし 三和  
 スよの中を碧合の屋たさる 森  
 高きささるく終る 下末 乙春  
 梅雪のきて末終る 一有

一掃

〇 是の月出れ先は空府のあしス杖出さる

伝吉

〆 雪てゆくをそのまきや冬の月 其の  
 〆 鞋の出てゆくおろし 嵐介  
 〆 乃よささるくし春をわたり 喜原  
 〆 冬の月白く直さる 梅花 乙由  
 〆 春の 乃のい何のまき 水甫  
 〆 乃さるくあくとよまけいおおち 仄止  
 〆 乃よささるくやちの 杖風 季鹿

東巻  
八百







△日よき者の日次哉不極 多音

白仙 高う先よの中の大なるまき 天雲  
ふるふるふるふる日の際てわら 雲

月おれく勝ゆをききもぬも日一

△日次二去

冬 約執し西条をばく日のおれ 力考  
窓の日のひささげのそく起て 若

り拵 日よきの日影し響の影を糸 五桐  
ひよきの日影し響の影を糸 五桐

笠 日影もあつ大工こりり 甚二  
響の日よき長一誘いりり あり

春 西さく拾おの 拵日 阿常  
まきまきの永きもたの一日夜 五吉

三日月 夏の日おの西さくこまき 嵐七  
杖突のそよふきまぬ日影も 碧枝

△教字日次二去

白乃仙 杖もたもさくまきまぬの月 三惟  
情の海ん 白日の片扇 雲

り拵 云しよありすよい 一儀 涼ト  
娘松の位吉傍 十二款 仁行

に湖 云月よまおのろ寸取れて 柳三  
は陸くも大と 只くく 碧芝

△日次二地名月日星哉不極

高 深草と星崎まき 草 枕 舎庭  
何とふれゆく片巻の声 知是

白乃 傍さるる日影文あつてくし あは  
海の日影し響の約末 小枝

日 ちおし成と白まそおろり 徳 教書  
日影くまきまおり一五 万子

又月 葉名くまきまおり一五 柳コ  
響のふれまきまおり一五 柳コ

三イ併字美の例もあつ拵字の教もあつ日次の

文字の多用を以て辨に字類もあきらかにて字工字  
の用い効り多用を以て字類もあきらかにて字工字  
甚るるより一に万遍の法武安よきなり

△日工字付句

多者

東花  
あきらかにてくちのち糸 木守  
依結構を口わきりりり 徐子

△日工字付句

はれ日字をきり日のみり 昔物今物 御書  
既立即新のふあれ日字工類す

山

程母よりこのまゝなれり  
なまをすけい付ちあく 丈和  
清海子日和舟のきり合て 和子

三匹

杉原に花を添て標の花 菴か  
入る月のまきつくと乙色 常

柀

日やけようこそ 傷をいさけり  
あーりのまきまる侍傍 侍兼

朝日おねもあぬる守居者 南宮

△時工字付句

茶をくり香てりりも格う 支考  
身よりいしてりりもある俺 柀り

歳

親又の白もりりりり 白和  
まおろ何やうりりり 密水

浪

飛浮信よ出きてりりり 可及  
継すりのりりりりり 可及

焼む

りりり又ねるりりり 英英  
むりりりりりりりり 祇和

柀十

那の用乞の床の生花 和和  
むりりりりりりりり 伯和

柀

△日作の日おま  
そりりお白き守り 柀化  
りりりお白のむりりり 柀

日和

は木舟よといはれりりり 玉風  
日和りりりりりりりり 根桂

浪 ウ 月の日 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

狹 ウ 月の日 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

△同音異 日 ウ 月 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

市商 ウ 月の日 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

□ 早 ウ 月 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

□ 早 ウ 月 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

□ 早 ウ 月 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

花を配り 既 ウ 月 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

花の白い... 花を配り 既 ウ 月 ウ 山吹の ウ ひる ウ 知る

花ありきと林ありきもあらず一或は花やむむの洞  
 を古武も花ありき古抄も胡亂のさゝあれと  
 正花の注よの及きむ非証武の「素の花き」とも  
 洞も素のむの流ももつりく非証のさゝあれ成  
 似て今の化けもみちり非証野陰するをし  
 月もむも昔の洞のあやあれ今も海の花とあらず  
 但し四武の二注は注のむも味のむも去きりて  
 極物とありきとや一日の及注いむとれと今も素  
 家の武目二注万軍の情と分れぬ史きよめきりて  
 大を宮寺時と書りて極物と決す

唐俗傳連身は素の浪正花之注のむ正花は  
 あらずと古今の通武にて注ありむ極物と白子の  
 素は二割をむむはむむもむもむもむもむもむも  
 あれは注あり正花と一れと古武は純傳の格  
 おれんさる古武は但しきや極物花はむ花  
 ろきもむむと一むむのむむと史傳の事む

あるはれと草木の外の名をたとも時正花とる  
 及りと彼故及る云持て今の正花注と及さる  
 初一は故及るは白子よは花の注の故極物もま用  
 半持りてま一注の原原を許さる新二世の流  
 漢を同じきくる昔の明監を待らあらず一返  
 之のり止むのさる古今と何と分あす

星目難又時又月はきよめて素もス林の制あれ難  
 と又月あき注は難素はにきよあらず素の判  
 も初難のむも極物とありきる素ありて一注  
 けさるるわい及れい人とあれは素は三注向素と  
 又素素と及れ及素の極物と素素と流  
 味も付及れの花難むとありていふするもそ  
 や極物も同じも素合とて花ありてむむやば  
 初難むも難極物とあり後花も極物と  
 絵の真名も生れとありや又及素の名さす  
 めも素ありとむむとむむとむむとむむとむむと

ちり抄すまことすももま文首のきこし始  
 ▲系松の龍又文二南々ん理ありと似れりも書三花細  
 葉花の位乃支考の位白をそのれんて去支考の  
 又二癖おそわし終きる多きまて團圓又秋  
 の制ありは正巳所き角の集よス林の書好まある  
 いうよ又龍月ありは正巳考の人こそ龍月い志  
 くれ又花あきく入去出て方々の種お焼し所  
 龍非植のむあつら給方は正巳さるまはしきり  
 四ノ下上去出の時必を引上りて是と海出り  
 又非植花ありは正巳その相滅後二考武連の古式  
 敗てぬるのこ龍いえより法身子も何あり  
 書三系の出花條おの花やあつらも其れよの正花あれ  
 ち花とい貴族の二字よまうぬ  
 龍季の出花龍の出花正花なる一と先陣やきれき  
 ▲は二葉乃欠直武お徳の正子花の仍よ名考考  
 あつら六の色並格の都よ奉て表梅を切く

ちい徳事金持の今持金あつら西下をたつて正考  
 するもおも半用お持してまうと定むまぬる  
 ぬくさうあつらその他つを許らうのこも  
 自白よつらあつらおつらもあきするて正考はの  
 葉考つらお持り葉の出花條おの花やあつら  
 二奉の非正考の中古式の位おありとまて表破  
 すらうとまてお持り徳を信らうとあつら  
 は故よちお君用するあつらとて叙列しう  
 うつらおつら奉つらま末のまらるのまて戒とて  
 おる句只中の花と龍お非植の異件よ代む  
 といて風物おのまつら人あつらむも

△非正花お

花兄花極赤き花 花を正お持 花君考 花考外  
 花考花畑花檀 花考花秋花 正上五 月乃卷  
 風花正考おのむ 花田花考花後花帽子 正上  
 像考正のむ花考 考考を考のまま花つら

花ぬり 灯のむ火花 咲くは花やちいし 花子

化法 一花さくら 二山人山吹 千去

乃ちや乃ちひらけて花極

白や花極と極くとくんそ一山二繩子あきの  
花とえはす時付もむし一身の伝へ始

新唄て思根の赤きむ候ぬ

東屋いまの花だよて 流浮を何しと思根の赤き  
花とて決て木瓜はじとえあれは何の名ささくわむ  
あけの空も極や極むと子姪さき極を用う始  
▲極を正花に代る中流浮て伝承されと正花とせぬる  
たされいやゆき木瓜はじと又田もむしと只正  
花をけり赤きむは正花といふ知る方よし  
空に極をけり何れを正むと人の悪あむ  
よの 志る葉の花の身と名をけり ちあ  
り夕 花極乱るく 山の世目 ソラ  
江州 瑞令もむしや夏の白せより あり

佐昔 藤あある川流し花吹て イ枝

新 白きよあむむき中月叔 牧幸

三美 杖の柳に枯れてさく何の花 播東

歌 草葉の雲相後おまむ我子 素後

中 又巻う後我草の花吹て 胡中

冬著 下り田の花も万へんさく 太夫

方原 月さあよ空 仙や子この花 除風

五葉 又幣文上 枝をのむ垣 方丸

三匹 杖のむき枯れよ小柴 垣 水甫

白見 杖の花にわか切後の 挿 番山

新山 花候初り 打筆の杖 东怒

十七 陽扇と枯れ月の花さく 五葉

句 けのこえらん 杖の風む 岱水

舟さき 風むよ曲る大のちくさて 若

江州 志るや鳥もちよる山 东若

辰 海むすらすきむし

辰 只花の文や只すく空乃空 二川

辰 只字寄へサル

十七 巨つぎの別率よむさく雲の雲 大主  
 峰さ六のむえのあししとも 五去  
 美草つむ畑や雲の故花 六花  
 初々もこよ花多のみおえ 涼ト  
 夏くくる月ぎくあふ霞のむ 之川  
 陽のむあたる杜乃 神風 倉底  
 む夜連を久しうてのむ 行巻  
 松葉より心のむささくは 柳敷  
 春葉の素もあを揺るゆて多 有葉  
 とろろと水さきこむ葉のむま 荳角  
 花子さくくろきぬくの袖 牛角  
 他花とあて花子もぢうぢれす 九阜  
 △正花より有名を三去 七乃多者  
 有名と有名も三去コハ字去の何く  
 三去くくすろろこまむの後 因民  
 卯のむさほめてすは花さけ 涼ト  
 うのむさほめて客をさすてふ

出 雲のさくけいを飛ぶ山やあや ウ中  
 けのむ仏の目とておちしし 匠昔  
 月もよ心のおろ原居え 鼠毛  
 けのむさてもえるよ候せう 猿人  
 保令て花牡丹のむり候 仙呂  
 むてあるそむを病後の又付 季俊  
 おくくくを疵もよそのむ候て 芭二  
 雲のおのくゆれまよむさう 東忠  
 柳の花よりぬのよあり子 白ね  
 雲披やむよさくよの葉何 栗ル  
 柳の木のまんえあ花為 仙ホ  
 不て又うむさく山のあつて位 翁  
 ちのむさけきけ糖の雨元 芳丸  
 中庭もねるむのえ草 湘和  
 ソのむりの月おと盟して 後石



昔

廊

品

文様

△去正花

考有

花供花法花会式やまの花 花生ハハニハニ因タル名

作花 紙花 屏む作花 花板 花舞 人る作花

花の教 花の机 花のむ 花の庭 花のむ

はる多也 花のむ 母の用す

三平 やすいむの 多の 小袖も 二

類 花長も 浮世の 柏の 作花 栞柳

長 紙むよ 花のむ 文と 花のむ 逸登

花板 候むも やとす 花のむ 去 嵐也

花板 花のむ 花のむ 花のむ 二

花のむ 花のむ 花のむ 昇角

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

△他季の正花 一三二

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ 花のむ 花のむ

花のむ 花のむ

さるに 花火打して 星をうつる ことお  
 あら 花とさきくさる 草の一種 干角  
 草をわく花下押さる方と正花をいふと花は傍の  
 百品 送感をおい今今月のむの以 天を  
 年比今とむある角かうて  
 杖あねや杖の白根を玉の花 信化  
 松葉の木の多さむの心を 挙白  
 夕 木急や枯木うむささぬ良 之川  
 夕 花の柳も 杖も 杖傍  
 炭 中への杖は杖の花のみら こと  
 花を紫紅く作る時と去秋合併のむあれ其  
 花をわく花下押さる方と正花をいふと花は傍の  
 杖あねや杖の白根を玉の花 信化  
 松葉の木の多さむの心を 挙白  
 夕 木急や枯木うむささぬ良 之川  
 夕 花の柳も 杖も 杖傍  
 炭 中への杖は杖の花のみら こと  
 花を紫紅く作る時と去秋合併のむあれ其  
 杖あねや杖の白根を玉の花 信化  
 松葉の木の多さむの心を 挙白  
 夕 木急や枯木うむささぬ良 之川  
 夕 花の柳も 杖も 杖傍  
 炭 中への杖は杖の花のみら こと

拾 花をわく花下押さる方と正花をいふと花は傍の  
 甚 風よむある 花の 笛を敲 力有  
 之 風うけて花のニツニツ  
 一 大崎むいんのむこー 仙尾  
 難 候むう脊の屈ぬ柳花て 糸角  
 音 ちねまむむお花も雪の雪 侍彦  
 音 梨葉の芳や今ようむ りお  
 音 口切まきの十徳のうり候 花如  
 △花十書を用る資格 花又ス  
 冬 たい衣笛を奏むと打ね お呈  
 隔 案人も奏むの厚く踏送 赤若  
 深 踏送く厚むの厚く踏送 出水  
 位 柳咲初て 花をわく 化  
 母 冬巻む親の厚く折く 泉石  
 △月花結る白玉 多信者  
 花月花結る白玉 多信者  
 花月花結る白玉 多信者



栗

おしほ 栗もむちり 栗もむちり 巳百

黍

あつむ 黍もむちり 秋のふ元 以之

稗

あつむ 稗もむちり 稗のふ元 稗化

元祿

ちりや 社々の 花さくり 古巻

冬

なほ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

り

あつむ 稗もむちり 稗のふ元 稗化

△他木の樹と花三去

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

冬

あつむ 雪もむちり 雪のふ元 雪化

正花は昔さけぬし園傍の白うけ付及中花字  
を入るのよし正花はけりよき付に秘考之  
そよ一白もあく出れるこそ中花さめれ文

△花のたのしみ

夏 月む花とよき人々會の舞交は漬して七白ノ  
 十白ノの言白きも空花を何よ及れさる付い  
 月花のたを必す事には七月の武の洞にされし  
 古歌の表八白ノ已下よあふ花をさき通らるる  
 ▲花をせぬ不表はは白ノノノノノノノノノノノ  
 春 句は白む花の徳言及ニウニウのお徳と  
 春 句とまたとて寺ニ三終の表の徳言若  
 くれは余りこそよおそもよし或は白揚を  
 冬 花を花を花を花を花を花を花を花を花を花を  
 あくはる白は中の花は引とるあ  
 日 陳前一の為昔のぬらぬ花さ 杉風  
 キン 花はあれ伏るむも二年えて 徳水

花鳥

白鳴ふ初降るり小亭の宿のむ 佐孝  
 花はのささりし町中をよよ 若

花

花は人の娘は大人の作花 伯楓  
 花むも女房の侍を帯 右深

花

千石の花は花もろくろり 八至  
 花の月よあめむもあり 小舟

花

花も花も花も花も花も花も花も花も花も花も  
 花も花も花も花も花も花も花も花も花も花も  
 花も花も花も花も花も花も花も花も花も花も

花

花は花は花は花は花は花は花は花は花は花は  
 花は花は花は花は花は花は花は花は花は花は  
 花は花は花は花は花は花は花は花は花は花は

花

花は花は花は花は花は花は花は花は花は花は  
 花は花は花は花は花は花は花は花は花は花は  
 花は花は花は花は花は花は花は花は花は花は

カイ印

●花

▲市へ出るとさる時友人花を舞する人ある時又  
 美を待て次は阿次次を渡して舞へ去るを聞き  
 花宮屋上乃よりあつりいん室をたふ去るは去る  
 あつりあつり舞言付は出さばて花をす  
 又二つ美人知事ある他は懐くまゝ人もあつり  
 せよく舞くる時俳句を待す花を待す  
 ▲よく舞くる人花を待すまゝあつり出るとり  
 又あつり阿次次すつくの句をあれ舞退は乃す  
 何方その引よて他は懐くあつり引よて後舞退  
 老はばあつりいん室の会はたの極古まゝ舞も  
 ▲痛くは他はの会合又祝式の会合  
 又よつ代り花ありき花を待すとあつり人の句を  
 き付あつりあつりいん室花を待す  
 ▲この花を待すときあつり出ると花宮の次は人の句を  
 代り花を待すまゝあつり待すまゝあつり舞退  
 月花を待入代りまゝあつり又花宮の句をウチ

又去出るとさる時花を待すまゝあつり出るとり  
 他はあつり花ありき他はあつりあつりあつり  
 かつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり  
 ▲花  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 乃んの舞るは乃り花宮の時 去来  
 ▲ひさ  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 ▲ひ  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 ▲む  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 ▲お  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 ▲返  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来  
 花の舞るは乃り花宮の時 去来

唐

中々初子せむ去のよ 李下  
花のまゝも して ねまう 一船

△峰出を待ぬ花

多者

芙蓉

花とひ来やとほ遠うりし 花

松葉

花よのねの丁と元月 元峯

カ仙ウを月花入代る 何多なれと思ふ

△花お後る風ふ若

七下及多者

花あふ風を許すは 祝式の人いへ 種多舌は 是  
除て自在さゆるるを 忠を世風もの白  
ふ笑の花を毎て出せり 香介 何と云はれ

有実

さくちり合きよる 出る 葉 貝高

射

再くふりやるる 花の 支考

難

色も 驚きも ねまるとの中 観水

桃十

只 花を みるの ふう物 物愁

你

相度と 稽直と あり 花の 暮 月和

匂

花さうりつれく 草を 引出 許六

花

本丸を 打たて 又々 花の 中 其終

岸

ねねの 徳を 懐て 神の花 辰昔

捨

花を おろき とも なる 手

浪

春風 の 吹く 果を 風より 東友

長ラ

ひる人 の 心乃 ぬく とき 澄 秋函

与

花さうり 花の 種を 伯根

唐風

カイ印に

●唐

捨

ちるむを捨てて月も山陰う 桂楳  
雲うら車風のうらみはしも 叩陽  
三石の申床層子花さう 為白  
ハツトより去の吹降 三拍

浪

△風立ちむ残ふ煙 多者  
杖風よ砂を吹残る 陣声 砂さ  
夏より信守居の芝草 え妻  
むは皆ちりて儂くおのま 一吹  
△花お后名は不苦

お六丁を月よ名はの村と仰くお后の煙か  
されしおよりおのれおのれおのれおのれおのれ  
よの許さよと又まある村の吉のよ志のものおのれ

宍

根を凡を花んよりの 由  
よの山梅くよの梅 陣六  
閑白のお成のむの候より  
小倉山風より雨よこさき  
白粥のや飯より雨よこさき 某邑

山

卒

他の通 花のりきり 木因  
約を中不二と吉のさ三不帯 某枝  
西をさむよん又ぬむの雪 某二  
吉のり神も心して嵐山 由格  
まよあつれむよあつれ 比重

に開

志契の芳の初自慢うは柱  
月より梅も三友の徳々 産え  
△二三一のむ

月花を捨る他キの花捨る花正花梅 花字  
右おウ内ウ出片ハ白句ニテモ外ハセス  
賀お花風お捨るむ名お捨るむ花梅の村白

神尺名名不表に案おのむ 教候 蒼木のもの  
又外同件に案ヲ許サス花ハ月ヨリ判キシ

形

橋妻の木の名を花のんをも 某白  
三度よむよの梅よの山 仙化  
やばい又外よあ

△同執向の冬妻格



去と杖 花の表窓の泊はせたり 口通

名 入るてあやうき人のむの奥 三羽

ヤハ ちよふめむ不二の給と云 素袖

柳登 身乃ちむ若あけの志がのむ 示右

紀心の山使あれは雪の花 布胡

きとまきとえぬとあまう 壬生あむ 巴分

大傍う花より傍へ人も来す 翁

ちとちる男い妻重きの陸撞て ソラ

法下い前てはさる穴うの花 踏突

あひまきと一勢てはの花 东ち

山門は大木の花 咲とれ 西替

むさけい山の奥と知ひて 呂杯

さけいあさうぬえも花のや 衣お

候まよころつひく雪の花吹て 船曲

ゆさされてはるむるは青 尺新

花をむるは秋の竹没 りお

るの風候あめ付れ異あすては皮てせぬとて

更もはかみとて南の北とすききもの

△雑花変格

いふあれは筑紫の人のさけりや ソ重

根中 古替のせがき 花血と花 信風

ア桐の声終るるは月入ん窓 三羽

花は柳樹をる窓もむせぬとて一羽

花血と花を押しはれはたかくきと漬くへきさる句

この花のまあるはと花は初より

一皮あつとや二皮あつと 小枝

まらむ杖のむとせれも 支考

胞ぬまのまは互敷とらう 匠者

折んてらう寸きもきし 欠音

いせの海白子の不改花咲て 凍ト

ゆとくくはは後あう 貝宗

淺火は別て鳥鷲す 常久

花の去月の杖を尋 仲二

我込れて珠おつとるは 良吉

よーゆーゆー末々きぬ山椒 菴南  
真仙 娘連も此九念のまき花 天香

大なるのちん又ても又ぬす

是は正しき花と作て物とすうにす付て  
花んあまうにぬれも物とすうま格あれい母とす  
但月花むおまあといふ白の物とす

台 作花母乃きりむと何て 山と

作心い物のおあれも大方まを階す

本物 象物のももなると遠り、凍三

コハたあまあると何れも物とすやます

かゝるもの幾い花より足る

花のむい杖ろりあまあまきるんか仙や  
八白より月杖をける何れ土白ノの花ま及  
くくさるるまきを障りぬれ其まの物むを  
物花よりさる去て入去をすうりおる花  
花舞も極美の何れ物止花之まを付

色く叶い又ま花とす

△は泣き歌の月杖は花のキ接いまは泣きの花  
キ接部あり花つる何れ物とす 季津原子  
あー又物むのほは又まをすはモ物花とま  
三まはモあー又花物太方物とす又は  
あまも物花より足るはまはまは花あま  
まはぬ物あれいまをむる方とすむ花物ま  
トそりい物とすま花はあま

△花は打たし物との花

△は泣き歌の月杖は花のキ接いまは泣きの花  
花のむい杖ろりあまあまきるんか仙や  
八白より月杖をける何れ土白ノの花ま及  
くくさるるまきを障りぬれ其まの物むを  
物花よりさる去て入去をすうりおる花  
花舞も極美の何れ物止花之まを付

木敷の許さぬはわし若宮を成し木敷出雲  
中敷さても又次は花をせし草敷の苦くし

△梅を正花とする変格

新 三度ふむの梅の山 他化  
あを身む心あり乱世の伴と見え去れぬ方の  
三度と去の山と臨揮多し只その身も所  
さる梅の光よりきめくと授受の世を欺く付  
あり故に梅とすむに付るぬ也

管長 去来むと梅と之むとく菊日かいう末日  
九花の梅とありとつる一通りする中より  
早まむと梅とのりきし菊日されし古人の  
旧中の内一むの梅とせしふたぬきとありす  
されと尋ねの梅とせしと論ありむ始  
と吟りねむ句系終くと実あり 去来

管長 菊日付合し一本梅のあり細川は下より花候  
先ま口決りぬ正信ありとつる又辰又工用り  
志あり去来梅ありきし去来の花と書て梅信を  
解りし却して梅一本の時に候完或は答とつる字  
をおく可くは正花とつる中ありぬ也

▲梅信ありし中あり梅歩工用れをかくし  
きむ梅あり又候完答字ありぬ梅用を  
よむと名も非之菊歩工梅不美致の人とけり  
貴致する人の教を述るる手梅言んし系梅の付  
二句のえとのとく梅ありし付とつる付を  
あつと梅歩梅信といと許されむ

梅信ありと又候て正花と梅する人もあり梅  
非正花初人の人するも中ありれ口付あり

△三ツ花といふ美致のむ名梅は只三の上之初梅  
は梅の梅の名字持或は梅く或は歌に梅  
よ入るもといひて毎と書らるる也

▲定彦を極めたい村の手柄をふりて一白  
も隙なく仕立あり極はより一輪ありむ但能  
を引上りて守定彦ありて又去り行くも定彦  
定彦伴云の誠つらう下は奉るに何のよりく  
花と遊てりよき句出来るれありむ

▲**六** 藤乃句は花中あれカ仙いる句ニア一乃  
句おろし一申すとい少一申す多しされとも  
面の宮あれは定彦と中古已束定れり極は  
初折ちる花おて名程よすきむありえ  
より句おろしるるる花あれは極遊り何と立  
て極より極されり

▲己の極ちる極はめを怪て我れあさるるまき  
をとり初折ちるむ後おきむの多極は  
又さるや又極はるるも極はるるトしるるまきさる  
や又カ仙は二折るれ百句のま何とそま  
しりれり一といしるるるそり

▲**不** 極正花工用るる本式白花は極るあまのせり

▲只連号小山句才九初人極は極は山極は  
何れもしるるるむ極はるる又さるるあまの  
あ後の何れもさる

後極 双ちり只さんとちれ極花 木因  
小文 藤屋に極は極は候出て 養信  
秋百 極花さけつるるは候とより 水甫  
其極 極さくちにお講の仲る枝 僧依  
は何何あふく射しむと何れもよきあとお母  
さ極はより強て極する村よあり

▲**五** 藤乃の吉野の岩に牡丹が  
注 我國のまは山極候よりり

▲**五** 藤乃の吉野の岩に牡丹がと岩の一  
字に極はるとかふ令花との事あり極は花  
極はりて我國の極は極はさるむやは極は極はの  
ま地より極はる牡丹とい極はるる何の花と極はる

▲用糸紡いで強妙とされども是を再々相めむ

白きと梅は伴遊の浮るる

是れもすす尾上のうりむ

▲蓋はひ折山の唐とくみ私弄に敷る種類より  
其中の果ては花を隠すや物よりけきむむた  
よて片降と付くは梅は花は泣かれと定まる  
つて内いむよお梅まあり物らあむむを合  
されは其梅の胸むとすさよもと其花の片降の  
一決せり但片上の二字は内所の舞の念を梅より  
▲三八花二世の信あり再するやあれ信は如花  
を分むは事あり但果はむを合すとて是あり  
そを又修し正花よりて定たり他は種も梅は  
たれとさる候いあるは胸むと付くと又也胸む  
も去のむも甲正花ありわむは取を付し陰に  
あり扱して事核の流る古例さう初て後己と  
う事行むて物しとを行ふものこ

△花は梅と付梅むむを行ふ也言

▲古より花は梅と付る中傳授ありと初ん  
よ許きた或は梅類の教ありあむの元はあき  
梅ありゆきつくへきと但是は梅ありす梅は  
ありさるゝありすとす事家の傳授は端

ウ 幸傍乃松は花より梅より 尾  
山を梅と志ある去 西 千那

傳曰きけち其世の人には約とありひるの言振の  
むをえりかときく眺るるより幸傍の松を  
梅より面白むむと轉の詞さうて決まぬは  
むの妙あり梅類はけち去の部はあれけし  
昔ありし山梅はとよみし又ありし風景  
を好し幸傍の松を花よりとすよ山は  
子の梅よりむむと梅のあねと志れとす  
▲本句のむむは次ありともむむは梅を  
えりしむむとえは梅はあね乃伴とえて

百の梅工奉侍の事を定まりし方  
明字に梅工奉侍の事定まりし方  
記すに平あきなり

お ちれし梅の木隠の事

梅の花と梅の木の事  
あつたりて時のむらじれとらふ木  
梅のさくを又むと記する梅のさくを  
ちれし梅とちれし梅とちりしる梅の

梅 柳 柳 柳 柳  
柳工梅を移る梅や 柳

あはれさくさく梅の不静の事と記す  
さく梅の事と記す梅の事と記す  
さく梅の事と記す梅の事と記す  
さく梅の事と記す梅の事と記す

は 柳 花すくし泥軽造り神合 立

山の梅の事 梅の産 園

木 山川を吹陸する 木の事 木

梅 木 梅の事を記す 梅の事と記す

梅 梅の事を記す 梅の事と記す

梅 梅の事を記す 梅の事と記す

梅 梅の事を記す 梅の事と記す

梅 梅の事を記す 梅の事と記す

梅 梅の事を記す 梅の事と記す

梅 梅の事を記す 梅の事と記す

橋山

山伏の山とつるま山 橋 許云

三平

橋さくやぶの牛の自さく 西平

采

橋をさあち市麻川 竹翁  
大和殿くつるまをむき 嵐亭

□本草賦不煙

古三三

一は

浪上花入の厂の中より 信孝  
やこゝ一依 松一庵志

古松

葉やみの葉まき厂の  
舟あれは行浪丁を 去徳  
狼の青圃一の松乃風 似去

老栗

物まぬ傍をまき草彦 翁  
竹向山さき今とす 幸年  
笹竹のそとらと屋上 翁  
種とまわふ下りの草川 石亭

花

他社を尋ねて花の思入 翁  
み木をえまき 梅のひとせ ソラ

草

草むしり 植まえるウキ草 凡兆  
乃人の登る花の文む 去来

水

又第の中もまきまき 林隆  
供人の門まきやく月夜 理業  
お祭物まき 笛の夢中 和文

六行

竹まきりの屋く 明守 ヤハ  
勢合もまきまきむ 老白

朝川

扇衣にれの中の花乃去 藍水  
まき物一 橋の水守 佛松

山

嘆乱守博のお例の葉控畑 一楓  
夕日まき花 西谷 東谷 美川  
あま自膳の何峰子 枝酒  
山吹の松羽の 雞 絵 杯舟

△木教二去

古八去

⊙

冬 初花の世もよりのいふゆへに  
 秋よも来たるむら松の声  
 冬 閑れ—高の榎乃ちるたぐ  
 一抱 早花の松乃 十抱 閑れ  
 梅ちりてむきくまの賦さき  
 松の山風を 中あ—い文  
 木犀の白いさあ守村あり  
 乃聲木も小きき榎のま  
 神木の松を 木の香奈な  
 起てさひ—き松の白  
 此花ももろそお花さる  
 池面もえ家の像乃 榎  
 舟いあり—こんちの松  
 二十之三手折 ちか  
 いろは秋花さる守あり

化安

梅干

秋

殊

種

一抱

初

冬

木教おぼゆる梅よる申の例もあり

△草教二去

古八去

⊙

冬 芝原のまを 初花の矢は後  
 春の陽志を—むゆへに  
 高萩の角力ちるを  
 解りてるまのまのむ  
 き—ききの実ちるま  
 一りん 吹— 芍薬の  
 実芝ある何まを  
 入山の茨はる—き  
 甲の 母乃 中—  
 忍たまのの 秋をさつむ  
 引くく草の影子をけは  
 おお花—運まのし  
 花のまらやまを  
 △林植お同伴草木  
 草の属—田畑の植  
 田畑の植おは 梅州  
 教菜と

一次

化

印

蔓

冬

冬



苗代青田の松は属一種は松川赤い懸  
くま松は松川赤い懸は松川赤い懸  
く又木の属は松川赤い懸は松川赤い懸  
食は入松川赤い懸は松川赤い懸  
拘は松川赤い懸は松川赤い懸  
君不部入松川赤い懸は松川赤い懸  
木草の生は松川赤い懸は松川赤い懸  
木の生は松川赤い懸は松川赤い懸  
但竹松松川赤い懸は松川赤い懸  
おは松川赤い懸は松川赤い懸  
同は松川赤い懸は松川赤い懸  
賣は松川赤い懸は松川赤い懸

二上山や葉の花 小枝  
きりの松川赤い懸は松川赤い懸  
一子 松川赤い懸は松川赤い懸  
吐とされて休む草取 十丈  
千川

トナ ばまのりより子き花の陰 菊

真 陸のまんの又西の苗代 松葉

白 腰を被てノる 禪 花云

草 草を葉一枚おて草花 徐子

徒 松白やるまじ松の日と月 金峰

草 小畑まじりき葉は松川赤い懸 松川

草 州の戸乃ちを松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 草の葉下葉は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 秋の葉は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 死不入松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 草の月松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 松川赤い懸は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 松川赤い懸は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 松川赤い懸は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 松川赤い懸は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 松川赤い懸は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 松川赤い懸は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

草 松川赤い懸は松川赤い懸は松川赤い懸 松川

|    |                  |
|----|------------------|
| カキ | 出代も高樓の芳を呼びて 甚二   |
| 文様 | 空いさしーき木の杖 芳堅     |
| 松  | 春一を花よ吉の葉もあす 乙又   |
| 梅  | めきまはつて修く梅の宮 正孫   |
| 西花 | さくはく告やる友の花よ来て 光純 |
| 白松 | 夕月よきて面白く土境の松 半水  |
| 今  | 秋候くく飯の芳隠 万水      |
| 梅  | 梅の木の花を賞よ一芝 吐き    |
| 松  | 門松を賞納ても真めり子 糸角   |
| 今  | 母を恵よくく山ちの欠 独天    |
| 松  | 月や虫花の浅乃水吞て 助豊    |
| 松  | 冬きりく雪面白く梅を冬 言吹   |
| 松  | 山平く雪ちの山影の風俗 柳士   |
| 松  | 衣肥松のふ乃煮くれて 秋信    |
| 松  | 干粒くむくささく梅を冬 信化   |
| 松  | 紙衣の衿く角おりの拍 小枝    |

|    |                  |
|----|------------------|
| カキ | 出代も高樓の芳を呼びて 甚二   |
| 文様 | 空いさしーき木の杖 芳堅     |
| 松  | 春一を花よ吉の葉もあす 乙又   |
| 梅  | めきまはつて修く梅の宮 正孫   |
| 西花 | さくはく告やる友の花よ来て 光純 |
| 白松 | 夕月よきて面白く土境の松 半水  |
| 今  | 秋候くく飯の芳隠 万水      |
| 梅  | 梅の木の花を賞よ一芝 吐き    |
| 松  | 門松を賞納ても真めり子 糸角   |
| 今  | 母を恵よくく山ちの欠 独天    |
| 松  | 月や虫花の浅乃水吞て 助豊    |
| 松  | 冬きりく雪面白く梅を冬 言吹   |
| 松  | 山平く雪ちの山影の風俗 柳士   |
| 松  | 衣肥松のふ乃煮くれて 秋信    |
| 松  | 干粒くむくささく梅を冬 信化   |
| 松  | 紙衣の衿く角おりの拍 小枝    |

カキ印 五七

早苗

おんしのついでに春は色を成して 千枝  
葉の名代 葉はゆるり 松人  
ぬるぬる種の子の陰声 松之

十七

ひさよひやむの桂の葉の陰 早松  
春の葉を おとりの葉を 葉母  
夏はちと向へぬるふの穴 葉冬  
ふくおもひあふきの月のも 雷之  
葉の早 冷鳥つらふ 葉

川はま葉裏まねるおの秋 文水  
△木草字各三云

下

おく原むむの枋乃木 葉  
板木の葉はあつちの葉 陰子  
初木の葉はゆるり 竹司  
町をゆるり老木の葉も異れ 扇右  
晴のさし木も木丸の頃 可之  
竹の葉はゆるり 木丸の股 如中  
殿もゆるり麻の山の木丸も 扱水

丸

了

次

尺幅

休

花

梅

和

一

赤

木鼠の之を合し新の下き 才丸

青くと川の向乃反木を 月丸  
秋も皆木葉とあつちの葉 梨月

袖柵はあつちの葉を 子去  
竹柵はあつちの葉を 扇

二とん草丸も早きん松は出て 去来  
草村は陰もゆるり 九枝

雨はゆるり草丸もゆるり 僧川  
角力に吐て 草丸もゆるり 三枝

草丸もゆるり 草丸もゆるり 草丸  
刀は草丸のゆるり 草丸もゆるり 草丸

草丸もゆるり 草丸もゆるり 草丸  
△松竹 草丸もゆるり 草丸

草丸もゆるり 草丸もゆるり 草丸  
何とて松はあつちの葉を 草丸

松の葉を解し 草丸もゆるり 草丸  
松丸はあつちの葉を 草丸

カイ印 六

松竹の祖又草上下に出きて 麋附

世持木や世持の松は名持て 子角

八条も九条も松の万々々 山人

松まを声の万々々夕月 未因

初花の植は古竹結どし 一花

二三中竹切るとんかんかん 支考

あられてまのくくくく竹 山店

ふん人持て持て来る大吹竹 嵐竹

ま竹の杖の言もむ老の口さ 苔履

琵琶の僧さうくく竹 風麦

松竹の五去身よりあり草の植ははゆこ

松竹

麋附

子角

山人

未因

支考

山店

嵐竹

苔履

風麦

子角

子角

松

竹

梅

葛の竹の白又草の持はゆこ 昌英

△苗根菜面去

根松苗竹松乃あり声 出子

苗代まゆのふまきくく 嵐雷

ちるむは根さうらん風若 若

長門より西のむ乃根向て 若

根を分て牡丹と持する 松と

持は根さのの根ある 松 已を

梅系菜まきこの病のさう汁 若

仄系ちく寸芥子菜の竹 凡花

を菜菜めくおまの竹 若

麦と菜梅のむを移し り合

△穂実種面去

あーく竹はよ門乃松尾 世菜

穂ありの穂は出て急のむいさ 秋青

穂も始て日又の梅の實 老胤

人まけ守絲の實のほ秋の月 二十

葉

葉

葉

カイ印

丸

一 種まゝ人の胸の斤 示 信風  
夕白の種より比ふまゝなり

△ 黄菜 面云

片も寸まふて敷のる丁 白地  
柘の皮をそきて敷張 草

月まの件せうき菜の敷 破笠  
菜の戸向く紐たきらむ キ角

△ 柘のお茶 面云

△ 柘も柘も花と茶とを面云て只一あり

△ 柘のほりきれもきりまじり

△ 一毛二毛の柘也 百あり

柘 美柘也、葉ハ 柘 葉ハ見白一 柘 葉ハ見白一  
イ名向三ツ一 柘 葉ハ見白一 柘 葉ハ見白一

柘 葉ハ見白一 柘 葉ハ見白一 柘 葉ハ見白一

山吹 葉ハ見白一 若菜 モノ 蕨子花 良ヨシ花 葉ハ見白一  
イ名ニカヘテモ

牡丹 葉ハ見白一 以下 葉ハ見白一 葉ハ見白一  
イ名ニカヘテモ

葉 葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一  
イ名ニカヘテモ

右の扱イ名ヨリ他キコウ之も同おまれの在  
一二決て寺又二三字合する名は種も多し

△ 菜枯も一毛二極おれ去 丸ハ母

柘 葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

如川 葉ハ見白一 葉ハ見白一 葉ハ見白一

世壽

八加乃川の糸死喜柳 彼側

壽

八梅を蓋乃院と死 糸 似去

辰

八平吹の梅の机のおまよそ 糸

七

ハの早や梅定ぬ山うらふ 糸角

六

アまも梅のおまよそて又る 糸

五

ナ喜をよりおまよそりうう 糸

四

アおと梅枝のくさうの房おまよ 糸

三

そそのむさく 糸乃白妙 先放

二

イ一後残る 糸そのあふまき 糸七

一

□ 冥生教不絶

世壽

あの花のちるぬ 糸まうあふらん 糸

喜園化世の只日用の世を二世の人和を及べい  
おまよりのおまよまきくき年ありとも  
又日の世を二世と又世す下

世

揮月の上の色しの際 八

白

大をおまよと梅とお小僧 糸王

あ

吸おの梅うらと人の梅上て 糸

あ

伏足の丁を二世うきく 由之

あ

是れ又山名の方乃長短 糸

あ

悟でせうぬちの夜合 糸

あ

古も猫の跡と傍あり 糸

あ

松一鼻とちり梅角の千代 糸

あ

化世の室死を傍に人 糸

あ

る碎と教を返る夫風 糸

△同生教二去 糸

年誦く梅うきくの時を 糸

我入る梅と庭の山名 糸

梅の肌肌をうらあふむ 糸

誰くおまよとまよらんをき 糸

梅ありまよちやあふらん 糸

甲者あふり殿をえんを 糸

山

精進よりくうらうの声 林房  
出てゆくまをたむこも さう

市

小浜の岸来て休むほほ 海生  
夕まき砂より一掃良

む

あまの山犬の 声 龍  
龍の身を枯庵に矢に別て 約雪

去

秋上て杖あてられぬ大の声 海運  
月も今宵と又むるの市 三羽

市

追ひの網を角のあす考 素年  
手拭後ておろす年の高 支考

枯

声もあくおの麻乃小葉む 神叔  
まあうう一年よる声 夕我

ア

山老妻のきりき敷も冬来す 之乃  
枯のきりや 二尺 陰 独

字

まきまゆ 由より 粒せ切粒 席月  
たしみの田中考をのこさき

△同生れ村白

多者

仙

山雀の持桿は尻くけ 俊徳  
とり 青奈の月白抱おりまてゆく 三羽

初

かを候のおあうと夏やまつむ 三羽  
ムシ 白雲のうしろ白き羽理細 何由

浪

手舟も黄之工防風ね 手  
手 舟中のよありまづ一格も 嵐雪

誰

思ふまゝとあく虫宿粒 キ角  
手 思ふまゝとあく虫宿粒 キ角

△町子ねは生敷 網は桑多枝不嫌

いふあるまの星もやはさし生敷に二白さゆ  
網は桑多を二白さる何く  
コハ古式を難すとて争ふもむ在るもさる  
まきうたあきさるの支考 汲の傍そまう

天

山も葉山子と笑ふ苗代 芳路  
花ちも林直の時え急きて 葉路  
梅よささるぬ号乃 函 手

皮

ちちのうきりをすす桐のそ 凍ト  
月の簾はささんさとおろて  
その後うり子ゆい新 口は

△非世歌曰作生歌は茂不極

非世歌曰雷空の怪お水を扱一魚れ「物」の考歟  
田切おの病名「支」得彫おせれ「啄」お掘り  
名お忌材の生れ名「段」お「士」おく

雷

夕立の先うすや雷の声 楚竹  
ももあううぬ山際乃高 車眩  
さを麻の毒矢を袖に射る毛 毛

暮

お衣木のるる持る花の山 有り  
采る前も門の老人 鼠雪  
感して鬼の持をつく妻の面 キ角

鬼

風うりやせて雷お出ー 何客  
神の射持乃矢の根尋る 化形  
鬼ある合点て丑乃時系 和琳

お

陰うりてきとつむおる 毛

古格

只今の有る 岐の味危 其危  
川渡の杭木やおの傳うむ 似美  
とやくと星ののほし乾泊て 力号

拾

誰やう中出守 念念佛 然人  
思入る戸を叩くて夜をそれ ヤ水  
を付中よるの爪お 示右

ヤハ

まこの巻を衣星に穿せて 音水  
衣のめてきき亜家の井 右

蔓

杖乃鳥の人會よゆく 鳥  
時のお分よ候は月夜て 工山  
きりの草よ花を虫つく 左有

天何

藤乃くのあめ指し志西乃第 壺平  
髪もようちも只あきき 櫻 鷹仙

奇

猫空れて後生一へん 山只  
栗坂のさうあうき夕月お 胡仲  
狐仲乃のそめくお入 凡草



加川

胤よりりるを猫の二人 杯舟  
及の裁走の砂一第目 羨文  
里子及を引く月狐川 里可

か作意を好くも生れあす

柘

木匠の校庭の外も月あ 吐志  
三上々後一月の明 反 漢虎  
葉山子の弓一戸も合兵 反 船

士

了士も洞まをりて立 小枝  
ねふの星乃 反あき花 也 角

村

木跡帯に被るる路の群 十丈

美生お茂の例の夥れと墨す

△考字三去 古一面去

拾

めきくといふやきき声 也 明  
むのまよゆぬ小考の幾群う 三 船

化

庭考の白き人よりセリ 午 船  
ちりくと短小考のおとされて

誰

大束の念も降しや合衣考 方 丸

浪

水考の何の板待立止り キ 角  
人の鳴り 考乃 嚙り 八 字  
凡乃あん目を尾長考と云 一 南

名

又洞考の考りる 石 四 入  
又扱いらりり 棟と庭考 宰 地

△虫考字三去

柘十

色も五色より色るむ 柘 吏  
乱く 窮うむも何やむ 仲 志

△了も了士也去

皮

月は尺寸守るの森考 柘 士  
了多しする考の市 立 社 志

勾

了うもあれて若豆とく 里 由  
後尖また今と通る十粒考 采 之

柘山

了字の明とおおりの五字 柘 敵  
考を考りる病りる士 右 靴

和茹

山為考の考れよる士の欣構 字 路  
家滴るよ考の子供あさり 新 古

三

△了 面去  
ありきりの上の右情一 竹巻  
うくくくを捲き立てる

二

△了 面去  
あつたの用は大ききく 番付  
風次第を正すのやくと

皮

△了 面去  
狐を田越へる月の弱 口角  
足取り皮空ねとあまら

化

△了 面去  
るのくまきてまきる極む 極丸  
葬れよまをくまの良し 良玉

氣

△了 面去  
陰ををるる手杖の宮 口力  
疾捲を戸塚の宿の侍觸

我

△了 面去  
きりる出エか一降手 止社  
初午のれ人の孤月より

替

△了 面去  
自給の能をお手屏の陰 太舟  
手強ひくてものかく 以師

△了 面去

セ

△了 面去  
強付くる 西窓乃角 秋玉  
寛浄の差もきれん板を 示右

同

同字あれども時刻と方角の違あり

花

△了 面去  
ウチもろく犬の侍は花おて 呂丸  
あはするう山犬の声 花

コ

△了 面去  
斗ともと繋てさぐのむ生る 石介  
生牛子乃をみるせし 口 茂只

△了 面去

張

△了 面去  
る月や別る大の尾を振て 老龍  
五の後素一尾長の尾の幸 湖十

揚

△了 面去  
さひきを神もお好の野の声 之魚  
向の影乃去ちよわさる 斗牛

△了 面去

拾

△了 面去  
牡丹をくをばく遠あはれのおは 三船  
ア作捲の夾き月の夕風 叩端



化業ア下よちりし阿房友達 翁  
ハ方去入陽。お尋の丁 子

一書  
アお衣を笑ふ初丁の声 佐幸  
ハ天正丁借令あて陽り 翁

已上八百白ノ例已下ハカ仙ノ例

砂川  
丁トノ名んあす末てある 理明  
抱込て松山度きあゆみ 支考  
ちくくゝゝのは初りり 明

二百とも二月あのはちあれと作異あなす  
ナ川 漱をきつる 年笑の献立 莫在

き却  
ハ志あくと小あ西かきふ小石川

同作あれとも献立と志の違あて許さる

海印録に終

